

地域の文化財をモチーフとしたアートプロジェクトにおける服飾 －「青い殿様プロジェクト」を事例として－

松尾 量子

1. はじめに

近年、アートやデザインによって地域文化の再生や活性化を行う動きが活発である。山口市においても様々な活動が行われている。「青い殿様プロジェクト」は地域を代表する文化財である国宝瑠璃光寺五重塔¹⁾をモチーフとしたアートのプロジェクトである。このプロジェクトの特徴は、プロジェクトを主宰するアーティスト自身が青い衣装を着用し全身を青く装うことによって青い五重塔を体現する存在となることである。筆者は2001年にアーティストが着用する衣装を制作し、以後、毎回のプロジェクトに制作・運営スタッフとして参加してきた。この小論では、2001年から2011年までのプロジェクトを振り返り、服飾の果たした意味や役割についての考察を行う。

2. 「青い殿様プロジェクト」の概要

「青い殿様プロジェクト」は、山口市在住のアーティスト松尾宗慶によるアートプロジェクトである。その内容は、国宝瑠璃光寺五重塔を青く（瑠璃色に）ライトアップするというもので、五重塔を青い光で包み込むことによって、地域の文化財の美しさを再発見する契機となることを意図している。プロジェクト全体はパフォーマンス、ワークショップ、ライトアップという3つの構成要素を含んでいる。この章では、2001年から現在までのプロジェクトの概要について時系列に沿いながら整理を行う。

(1) 2001年～2002年

2001年11月3日(土)、4日(日)、「青い五重塔に住んでいるお殿様」が山口の街に現れたことによって、「青い殿様プロジェクト」は開始された。この日程は山口市の大殿地区を中心に開催された文化イベント第6回「アートふる山口」²⁾に合わせたもので、全身を青く装ったアーティストが大内文化ゆかりの町並みを練り歩くという「青い殿様」のお披露目パフォーマンスが行われた。

翌2002年には、10月5日(土)、6日(日)に、第7回「アートふる山口」のイベントのひとつとして、「青い殿様ぬり絵ワークショップ」が旧葉香亭において開催された(図2、図3)。これは、明治時代から現代までの瑠璃光寺五重塔の写真をもとに作成したワークシート³⁾に参加者一人一人が青い色鉛筆でぬり絵をするというものである。このワークショップは、ぬり絵という行為によって地域の文化財としての五重塔が青い五重塔へと変容する過程を参加者一人一人が体験し、青い五重塔のイメージを共有することを意図している。

(2) 2003年～2005年

2003年からはぬり絵ワークショップに加えて日没後に瑠璃光寺五重塔を青くライトアップする「青い殿様プロジェクト 新瑠璃光伝説」がスタートする。「瑠璃光」とは、ラピスラズリ(瑠璃)の青い光という意味の造語である。ぬり絵のワークショップにおいて参加者が色鉛筆で描き出した青い五重塔のイメージが、日没後には青い光による五重塔のライトアップによって実現したと言える。言い換えれば色鉛筆のぬり絵による青い五重塔と青い光に包まれた五重塔はポジとネガの関係にある。アーティスト自身は、このプロジェクトについてのプレゼンテーションの中で、五重塔を青くライトアップする行為は現象として「新しい伝説」を生み出すこととなり、そのことによって「プロジェクトそのものがアレゴリー(寓話)へと移行していく」のだと述べている⁴⁾。

2005年には香山公園内の四阿(あずまや)を青いオーガンジー⁵⁾で囲うことにより青くライトアップされた五重塔と対峙する仮設の青い空間が作られた。この空間はアーティストによって「幻燈庵」(図9)と命名され、その中で青い殿様によるぬり絵のパフォーマンス(図5)が行われた。ぬり絵ワークショップ、ライトアップ、ぬり

絵パフォーマンスという3つの要素がすべて盛り込まれた形でプロジェクトが行われたのはこの2005年のみである。

(3) 2006年～2008年

2006年以降、「青い殿様ぬり絵ワークショップ」は実施されておらず、プロジェクトの内容は五重塔のライトアップと幻燈庵でのパフォーマンスに集約されていく。2008年からは、毎年11月14日に開催される国連の世界糖尿病デーのブルー・ライトサークル⁶⁾にアートプロジェクトとして参加（インスタレーション展示）している。

(4) 2009年以降

2009年以降はプロジェクトの内容からパフォーマンスの要素が薄められ、「青い殿様」不在でのライトアップと映像を組み合わせたインスタレーション・ヴァージョンへの移行が見られる。アーティストによるぬり絵はドローイング「青い影」というタイトルが付けられ、ライトアップとは切り離れた形でのインスタレーション作品としても提示されている。2001年にアーティストが「青い殿様」に変容してパフォーマンスを行うことによって始まったプロジェクトは、10年の歳月をかけて、青い光によるライトアップによって浮かび上がる青い五重塔と色鉛筆のドローイングという「青い五重塔」の光と影に帰結しているかのようである。

3. 「青い殿様」のための衣装

(1) 衣装デザインの背景

「青い殿様プロジェクト」は、瑠璃光寺五重塔を青く（瑠璃色に）ライトアップすることを構想して、2001年に始まった。この時点ではアーティストが青い衣装をまとい全身を青く装うことによって「青い殿様」に変容することは決まっていたが、ライトアップの実現に向けた細かな内容は定まっていなかった。「青い殿様」はプロジェクトを象徴的に体现し、街頭でのパフォーマンスを通して観衆者をプロジェクトに誘う役割を併せ持つ。衣装についてアーティストから示されたコンセプトは「青い五重塔に住んでいる大内時代のお殿様を記号的に示すもの」であった。そこで「お殿様」を連想させる⁷⁾ということから時代衣裳としての直衣（のうし）を参考にして、上着としての袍、重ねの着物を略した下着、袴からなる衣装構成（図6）を考えた。

(2) 素材

衣装において最も重点を置いたのは、素材の選択である。それは衣装の色彩としての青が「青い殿様プロジェクト」において重要な意味を持つからである。先にも述べたように、衣装制作を依頼された時点では、青い光による五重塔のライトアップは実現していなかったが、アーティストの構想として夜の闇の中に青い光に包まれて浮かび上がる五重塔というイメージが想定されていた。青についての考察としてしばしば引用されることの多いクリステヴァの論文によると、青は網膜周辺で知覚されるために、対象物のかたちの識別に先立つ「色の知覚のもっとも原初的なもの」であり、そのために「青は、対象との同一化と現象的固着にそむき、したがって、主体をその弁証法の原初的な時期へと立ち戻らせる」とされている⁸⁾。

このように考えた時、青い光を投げかけられた五重塔の視覚効果をどのように衣装に還元できるのかは、素材の選択にかかってくることになる。本来の直衣は高度な技術で文様を織り出した絹織物で作られており、その下には数枚の重ねが着用される。そこで、金属糸を織り込んだ絹織物に青い光を投げかけた時に現れる効果を想定して素材を選択することにした。何度かの試行の後、図8に示すように銀色のラメタフタ（経糸にナイロン糸、緯糸に金属糸を使用したメタリック生地）、と青いオーガンジー生地を重ね合わせて使用することに決定した。結果的にこの素材の選択は、衣装に硬質感と浮遊感を与えることになり、同時に直衣の持つ時代衣裳としての意味を解き放ち、青い殿様が特定の時代や人物に由来するのではないことを示す役割を果たした。

(3) 縫製

縫製段階においては、青いオーガンジーと銀色ラメタフタという風合いの異なる素材を重ね合わせるため、2種類の布地を重ねてずれないように20cm間隔にしつけ糸で仮留めをした後に裁断を行った。縫製についてはミシンを使用した。袍の袖口や前端は上側の青いオーガンジーの布端を折り込み、逆に下側の銀色ラメタフタは5mm折り

出してくけ合わせることで、視覚的には和裁でいう「おめり」の効果を援用したような銀色のラインで縁取っている。また襟元に重ねの効果を見せるために、下着の襟には伊達襟風に銀色ラメタフタの襟を重ねている。

(4) かぶり物と履物

衣装デザインの段階でかぶり物については、烏帽子風のかぶり物を想定した。素材は袍や袴と同様の銀色ラメタフタに青いオーガンジーを重ねたものを使用している。履物については、当初は同素材を用いた沓を想定していたが、パフォーマンス時の歩きやすさを考慮して、足袋と雪駄を採用することにした。足袋は履き心地と耐久性からオーガンジーとラメタフタの組み合わせを断念し光沢感を持つサテンを用い、雪駄はメタリックブルーのスプレーをかけることで、履物としての統一感が出るように工夫した。

4. 「青い殿様プロジェクト」における服飾の意味

「青い殿様プロジェクト」は、アーティストが全身を青く装うことで、青くライトアップされた五重塔を体現する存在としての「幻想世界のお殿様」に変容して「青い殿様」として出現することによって開始された。アーティストの顔は青いドーラン、腕と手は青いアクリル絵の具で塗られるため、衣装を着用した姿は太陽の光を受けると青く光り輝き(図7)、夜の闇の中に沈み込む。この意味において服飾は「青い殿様プロジェクト」の始まりに位置するものであり、プロジェクトの内容を内包するものであった。

そしてライトアップの実現によって、「青い殿様」の姿は、青い光の中に五重塔が浮かび上がるライトアップの視覚効果との対概念を形成し、服飾は五重塔を青くライトアップすることのメタファーとして作用する。その後、青くライトアップされた五重塔と対峙する青いオーガンジーで構成された仮設の青い空間(幻燈庵)が作られ、青い殿様自身がその中でぬり絵のパフォーマンスを行うことによって、実体としての青い殿様は青という色彩に集約されてゆく。そして、五重塔の青いライトアップの光に帰結することによって、青い殿様不在の「青い五重塔」の光と影による「青い殿様プロジェクト」が成立する。

このように「青い殿様プロジェクト」において服飾は、アーティストが実体を持ちながらバーチャルな存在となるための装置としての意味を持つのである。

5. おわりに

「青い殿様プロジェクト」は、地域の文化財をモチーフとしたアートプロジェクトであり、山口市の大殿地域を中心に開催される文化イベント「アートふる山口」に参加・共催するかたちで継続的に行われてきた。またこの間にいくつかのシンポジウムや展覧会等で発表されてきている。このプロジェクトは、アーティストが全身に青い衣装を着用することで「青い殿様」に変容することから始まり、服飾はプロジェクトの実現における重要な役割を担っていた。そして2003年に五重塔の青いライトアップが実現された後に、プロジェクトの構成がライトアップによる「青い五重塔」を中心としたものに変化していく中で、「青い殿様」の存在は青という色彩に集約されていくようである。今後このプロジェクトがどのような展開を見せるのかは未知数であるが、「青い殿様」の出現がプロジェクトを象徴するものであるという段階から、プロジェクトそのものが新しい展開へと移行していることを示していると思われる。

「青い殿様プロジェクト」は、国宝瑠璃光寺五重塔を青い光でつつむことにより、地域の文化財の持つ美しさを再発見する契機となることを意図して開始された。そして「青い殿様」の服飾は青という色彩を共有することでプロジェクトを象徴する役割を果たし、服飾のもつシンボリズムにおいて地域の文化財の再発見への意識を誘う役割を担っていたのである。

(この小論は、2010年度の山口県立大学創作研究助成事業の助成を受けて、2010年8月24日-25日にソウルの韓国国立中央博物館で開催された第24回国際服飾学術会議において「Costume in *The Blue Lord Project - The New Legend of Ruriko*」というタイトルでポスターセッションとして発表した内容に加筆修正を行ったものである。)

注

1) 瑠璃光寺五重塔は、室町時代に山口の守護大名である大内義弘の菩提を弔うために、弟である盛見が現在の山

口市香山公園の地にあった義弘の建立した香積寺に造営したものである。大内氏が滅亡した後、香積寺は毛利輝元によって萩に移されたが、五重塔は現地に残され、後に仁保から瑠璃光寺が移されたことにより、瑠璃光寺五重塔として現在にいたっている。法隆寺（奈良県）、醍醐寺（京都府）の五重塔と共に日本三大名塔のひとつとされている。

- 2) 「アートふる山口」は、1996年から毎年秋に山口市の大庭地域を中心に開催されており、地域の民家等が小さな美術館となるまちおこしの文化イベントである。「青い殿様プロジェクト」は、2001年から2010年まで「アートふる山口」と時期を重ねながら実施されてきた。
- 3) ワークシートに使用されたのは、明治45年頃から平成13年までに撮影された瑠璃光寺の写真12枚である。明治から昭和までの写真については、第7回「アートふる山口」のイベント部会を中心とするスタッフの協力により地域の方が所有する写真を使用した。
- 4) 2004年10月1日～3日に開催された山口現代藝術研究所（YICA）による「エジンバラ山口2004 パトリック・ゲデスの『視覚的思索』と現代の日本」における国際シンポジウム「芸術と自然の融合：エジンバラと山口」における「青い殿様プロジェクト」のプレゼンテーションによる。
- 5) この素材は、青い殿様の衣装に使用したもの。図7、図8、図9、図10を参照。
- 6) 2006年、国連において11月14日が世界糖尿病デーと指定され、2007年から11月14日に世界各地の著名な建築物がシンボルカラーのブルーにライトアップされている。山口県においても毎年数カ所で青いライトアップが行われている。2011年には瑠璃光寺五重塔の他、錦帯橋、永源山公園の風車、海峡ゆめタワー等が青くライトアップされた。
- 7) 山口市における大内のお殿様の視覚イメージは、大内人形、旧ザビエル記念聖堂のステンドグラスなどに見られる姿であると考えられる。1998年に筆者が制作に参加した大内義隆巨人人形の衣装においても直衣をデザイン・ソースとして衣装が構成された。
- 8) ジュリア・クリステヴァ、松枝到訳「ジョットの喜び」、is 増刊号『色』、ポーラ文化研究所、1994年、p.235

地域の文化財をモチーフとしたアートプロジェクトにおける服飾－「青い殿様プロジェクト」を事例として－



図1 瑠璃光寺五重塔

開催年	日時	プロジェクト内容
2001年	11月3日、4日	練り歩きパフォーマンス
2002年	10月5日、6日	ぬり絵ワークショップ
2003年	10月4日、5日	ぬり絵ワークショップ、ライトアップ
2004年	10月2日、3日	ぬり絵ワークショップ、ライトアップ
2005年	10月8日、9日	ぬり絵ワークショップ、ライトアップ ぬり絵パフォーマンス
2006年	11月4日、5日	ライトアップ、ぬり絵パフォーマンス
2007年	10月6日、7日	ライトアップ、ぬり絵パフォーマンス
2008年	10月4日 11月14日	ライトアップ、ぬり絵パフォーマンス
2009年	10月3日、4日 11月14日	ライトアップ、ぬり絵パフォーマンス (11月14日はライトアップのみ)
2010年	10月2日、3日	ライトアップ
2011年	11月14日	ライトアップ

*2008年10月5日は風雨のため中止、2010年10月2日のぬり絵パフォーマンスは雨天のため中止

表1 青い殿様プロジェクトの実施内容



図2 青い殿様ぬり絵ワークショップ 2002年 旧菜香亭



図3 青い殿様ぬり絵ワークショップ 2002年 旧菜香亭



図4 青い殿様ぬり絵ワークショップ 2004年
(「エジンバラ山口2004」 YCAM)



図5 青い殿様ぬり絵パフォーマンス

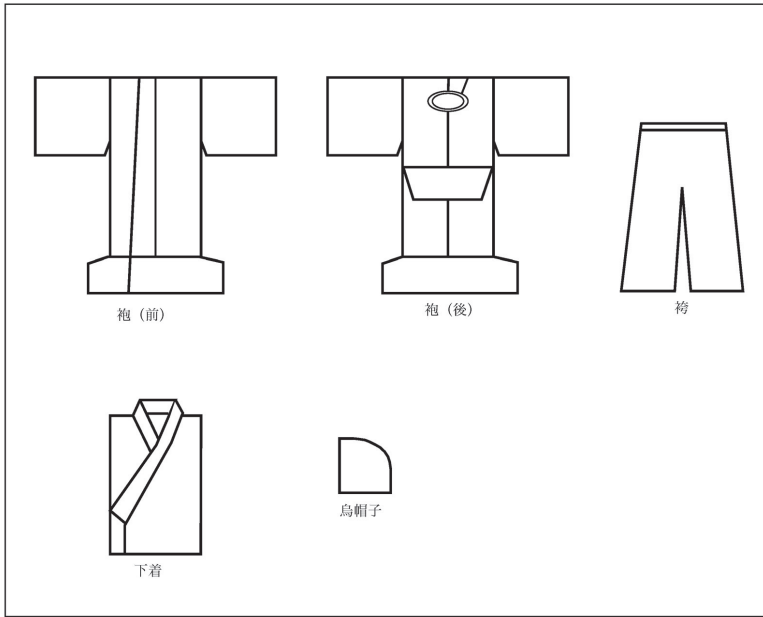


図6 青い殿様の衣装構成



図7 青い殿様

図8 素材構成

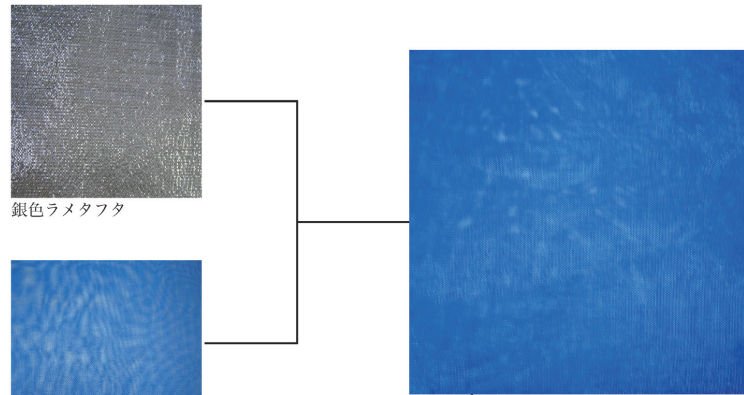


図9 幻燈庵



図10 青くライトアップされた五重塔

Costume in the Art Project Getting Ideas from Cultural Assets of Yamaguchi Area — Costume of *The Blue Lord Project* —

Matsuo, Ryoko

‘*The Blue Lord Project*’ is an art project of Soukei Matsuo who lives in Yamaguchi-City, Japan. In this project, started in 2001, the Five-story Pagoda, *Rurikoji* Temple, is lighted up in lapis lazuli color. ‘*Ruriko*’ means the blue light of lapis lazuli. I was in charge of making the costume for the blue lord in the first project, and have been a project staff since then. The purpose of this study is to examine the meaning of costume in ‘*The Blue Lord Project*’ for the past eleven years.

The artist who dresses in blue, acts as the Blue Lord in the project. Its costume design is based on *Noushi*, the contemporary garment symbolizing the status of lord. The material of the costume is blue organdy overlapped on silver taffeta. It gives the dress a sense of solidness and lightness, and pulls out the historical figure, the blue lord, from the specific historical era, attiring him with an everlasting air. Totally dresses in blue, the artist's face, arms, and hands are all painted in blue. Consequently, he becomes a blue radiating figure, and transfigures to ‘the lord in phantom’ that is the entity of the lighted-up Five-story Pagoda. It can be concluded that the costume in ‘*The Blue Lord Project*’ plays the role of the device for transfiguration of a real historical human body into a certain virtual existence by art.

